森立之の生涯 3

第一回で、立之の出生から伊澤蘭軒に入門するまで、第二回では、人物の肉付けをする意味で、各人の好物や当時の食生活を通して、江戸時代後期の人々の暮らしに触れてみた。

今回は、伊澤蘭軒が没し、失禄するまでの森立之を追ってみたい。

伊澤蘭軒の死・・・森鷗外『伊澤蘭軒』より

文政十二年三月十七日　蘭軒没(53)　墓は麻布の長谷寺。

蘭軒夫妻、常三郎は同一の熱性病に罹ったらしい。柏軒も頭髪みな脱す。

蘭軒没後は、榛軒(しんけん)が伊澤家を継いだ。

立之(23)は蘭軒に対しては師として仕えたが、三歳年長であるだけの榛軒には師であると同時に、朋輩として対したという。

●立之二十七歳の正月、池田瑞長(痘科で名があった)宅で新年発会式が開かれた際、芸者を上げ、森枳園が役者の声色を使うなど、静粛ならざる様に、澁江抽齋が容(かたち)を更めて主客を責めるという事件があった。　森鷗外『澁江抽齋』

この年、佐々木氏勝(23)と婚嫁、神田、鼈甲屋金兵衛の姉。二年後、生男子(約之(のりゆき)、春雄)。

●立之三十一歳　失禄して江戸を去る。

■養竹は、頻りに芝居の真似がして見たきに、或る時ハ舞臺に出て「ツケ」を撃ち、在る時ハ相中の仲間へ這入つて大名の一人に扮し、又

或る時ハ『ハツ申上ます』の役を勤めた事も阿つた。此の事、いつか目附役より言立てられて君侯〈阿部公〉の耳に入り、遂に『永の御暇』となつた。

澁江保『森枳園傳』

■枳園、家族(妻かつ。男兒養眞。天保六年乙未生　幷に老母)を携へて江戸を出発する時、嚢中(のうちゅう)纔(わずか)に八百二三十文※ありたるのみ。足弱連れを伴ひて如何ともする事能はず、湯本の旅店に宿泊するに及ひて全く無一物と為り、巳を得ずして臨時の按摩と為り、上下十六文宛の銭を得て、辛くも大磯に往く事が出來た。

既に大磯に往き、醫業を開きて後ハ、相應に流行して意外に収入も多く、且つ穀物野菜などの到來物も多かつたゆゑ、財嚢も甚しき空乏を憂へなんだ。

澁江保『森枳園傳』

※ 鰻の丼 二百文　盛掛 十六文　天麩羅蕎麥 三十二文→1000円とすると、820文は、25,600円となる。

■其の後、一兩年間ハ枳園猶(なお)大磯に居りたるが如し。枳園が、狩谷棭齋に就て學び、且つ本草を研究して所謂『先生株』と為りたるハ、永の御暇以前にてありたるに似たり。枳園既に永の御暇となりて後、暫らく江戸に居たれども、負債積(つん)で山を爲し、遂に大磯を指して逃亡(夜逃)したり。大磯の名主某、枳園の門人たりしに依り、枳園ハ其の人を便りて行きたるなり。

澁江保『森枳園傳』

■〈欄外〉此の事ハ書面に載する事を憚る

(元來生の父ハ、飽く迄も枳園を保護すべき心得なりし由なれども、甚好ましからぬ事二科条阿りて、多紀に對し、曲直瀬に對して〈多紀、曲直瀬ともに当時の大医家〉、父が意外の大金を辨償し、纔〈たったいま…したばかり〉に事落着するを得たり。それゆゑ逃亡等ハ之を傍観したるなり)

○ 阿部侯に暇を出された表向きの理由は、立之の芝居好きが嵩じて役者として舞台に上がり、演じていたところを阿部家の女中に見られ、次いでそのことが家中の上役の耳にまで届いたということになっており、鷗外は『澀江抽齋』にも、そのように書いている。

■天保八年丁酉(一八三七・三十歳)二月、故有って禄を失う。祖母・慈母及び妻子を携え相陽に落魄す。祖母は浦賀に在りて歿し、遂に大磯・大山・日向を歴て津久井県に至る。此の間十二年、辛苦勝げて言うべからず。然れども楽も亦其の中に在り。何となれば、半ば儒を為し、半ば医を為す。居すれば則ち幼童に教授するを以て業と為し、目に奇籍を読み、耳に異聞を聴く。出ずれば則ち手に刀圭を握り、足に山川を渉り、内外二科に論無く、或は収生(助産)を為し、或は整骨を為し、牛馬鶏狗の疾に至るも、来たりて治を乞う者、施術せざるは莫し。

『枳園森立之壽蔵紙碑』

※『自作寿蔵之紙碑』は立之が七十五歳のときに自撰した略伝で、青山道醇などの弟子や、今村了庵・浅川宗伯そして駐日清国大使の黎庶昌といった友人がこれを祝してエッセイを寄せている。生前印刷に付されたらしいが、死後四十九日の忌に孫娘鐄の跋文が追加され、立之復元の『神農本草経』とともに友人や弟子に配られたものである。現在、立之の墓のある洞雲寺の墓石にもこの自伝「寿蔵之紙碑」がほぼそのまま刻されている。

○ 明治になって、書誌学者の川瀬一馬(『日本書誌学之研究』)が約之の女・鐄(かう)に聞いたところによると、失禄の理由は、立之がある遊女のもとに通い詰めていたところ、遊女に迫られて道行と決まった。ある夜、ひそかに手を取り合って屋根伝いに逃げたが、急に後から突き飛ばされ、屋根から転げ落ち、自身番に捕えられ、身分が露見してしまったためだったと聞かされたという。実は、この女にはすでに意中の男がいて、立之はたんに利用されただけだったという。

○ 澁江保に対しても同様の答をしているのだが、立之の韜晦な性格の現れているエピソードである。

■私の見た所から言へバ、維新前ニハ、私は極めて幼稚であつたゆゑ、固(もと)より其の人物如何を知るべきやうもなく、只

『森さん、阿なたハ駈落其の頃、私ハかけ落とハ何の事であるかを知らず單に「悪るい事」と推量して居たのだ。をしたそうですね』

と言へバ、

『ウム、駈落をしたよ。駈落ドンドン

面白かつたぜ』などと答へた位のもので阿つた。

澁江保『森枳園傳』

『枳園森立之之壽蔵碑』　・・・池袋・洞雲寺

1　實事求是、發明頗る多し。又山に入りて藥を采〈採〉り、溪を下りては魚を釣る。桂川詩集有り、遊

2　相医話〈有り〉。其の行樂中、正名學に於いて裨益有る者は、一々筆録し、以て後攷に備〈備〉え、既に

3　一百餘巻に及ぶ。其の他、本草経〈經〉、素、靈、四時経〈經〉、傷寒、金匱、扁鵲傳〈史記列伝中にある古代医師の伝記〉、奇

4　疾法、並びに攷注を為す。弘化五年(一八四八年)五月、本藩〈福山藩〉の赦しに遭い、江戸に再来す。十月幕

5　府の命を奉じて、千金方を醫學館に於いて校勘す。功竣(おわ)りて銀若干を賜わる。嘉永七年(一八五四・四十七歳)、擢(ぬ)かれて醫

6　學館講師と為る。安政五年(一八五八年)十二月、初めて将軍徳川家定公に謁す。蔓延元年(一八六〇・五十三歳)、

7　九月、醫心方校刻成るを以って、又銀錠を賜わる。元治元年(一八六四・五十七歳)学館講書の功勞を以て、

8　月俸を賜わる。慶應四年(一八六八・六十一歳)七月、福山に移居す。明治五年五月東京に入り、

9　文部省十等出仕に〈補さる。〉後、或は醫學校に入りて編書を為し、或は工学寮に入りて講弁を為す。

○先年に「遊相医話」に見たとおり、失禄時代、立之は自由に野山を駆け回って、その本草学に対する実地の知識を拡充させたと思われるが、これを傍証するような伊澤家の門人の言葉が引いてある。

■志村玄叔(柏軒門人)「柏軒先生は病家に忙殺せられて、容易に採薬に往かなかったので、私共は枳園先生の採薬に同行した。私共は抽齋先生をば畏敬したが、枳園先生となると頗る狎近の態度に出た。しかし此の人は私共青年を朋輩として遇し、毫も私共の不遜を咎めなかった。枳園先生の本草は紙上の学問ではなかったから、つねに応答は流るる如くであった。想うに是は相州に流浪し、山野を跋扈した時、知見を広くした故であっただろう」

森鷗外『伊澤蘭軒』筑摩版鷗外全集 p398

9 8 7 6 5 4 3 2 1